

クラス番号	608	担当教員名	佐々木 将芳
テーマ	子どもや家族に対する個別援助実践と地域生活支援		
著書・論文	著書 : 1『障害者の人権と発達』 共著 2007年8月 全障研出版部 2『子どもの権利と障害者自立支援法』 共著 2007年12月 全障研出版部 3『しょうがい児支援ハンドブック』 共著 2009年7月 かもがわ出版 4『特別支援教育大事典』 共著 2010年2月 旬報社		
研究課題等	研究課題 : ①育ち難さをもつ乳幼児への「発達」と「家族」の視点に立った保育・療育支援 ②学齢期の子どもの放課後・学校外での生活支援 ③障害児福祉制度に対する「権利の視点」からの課題分析		

ゼミナール概要

キーワード：子どもの発達、家族支援、療育・保育実践、社会福祉（保育）制度

【目的】

ある先生がこう言いました。援助者は、「子どもの発達を愛せなければいけない」。この言葉の意味を私たちはどの様に受け止め、解釈すればよいのでしょうか。

子ども達は、障害をもつ、もたないに関わらず、その主体性を発揮するために、いろいろな支援を必要とします。また、孤立化・孤独化が進んだ社会で、子どもを生み、育てていくプロセスは家族に大きな負担をかけています。子どもの育ちに安心して向き合える、喜び合える社会の仕組みと、それを実践する人材が大切な役割を持ちます。保育士や社会福祉士など、子どもや家族を正面から、または側面から支える専門職は、当事者のねがいをその姿や言葉から汲み取る力が必要です。目まぐるしく変化する、子ども、子育て施策のなかで、子どもの権利条約でも触れられているような、年齢や発達の状況に応じた、適切な仲間関係と生活の環境が準備されなければなりません。社会福祉の領域では、これまでも子ども達のライフステージにあわせて、様々な実践が取り組まれてきました。

このゼミでは、「その人個人だけの力」だけでは十分に生活上のニーズに対応することが難しい状態とは何かを理解し、そのような状況にある人（子どもや、その家族）へ、どのような支援が必要かを考えます。

【学習目標】

3年次：「発達、障害」や「保育、療育」に関する支援・実践や制度について、文献購読を行います。各自分担して資料を作成し発表することで、今日における子育て支援や障害児支援、子どもに関連する制度の問題について理解を進めます。また、発表作業を通して卒業論文にむけた、論文作成に必要な技術、作法を学びます。

4年次：卒業論文作成に向けた問題意識の設定や、研究課題を設定します。そして、必要な資料収集や、資料の整理ができるようになります。また、必要な調査、聞き取りを実施することで、卒業論文を完成させます。

【方法・計画】

3年次前期：文献購読を通して、文章を読み解く力と発表する力を身につけます。具体的には発表資料を作る作業を通して、文献の要約精度や問題設定の適切さを磨きます。

後期：実習や夏休み中のボランティア活動など、現場に触れた経験を通して、自分の問題意識を明確にしていく時期です。ゼミ生の興味関心に応じたグループ学習やフィールドワークも検討します。また、春休みなどに見学旅行やゼミ合宿も行います。

4年次：3年次のゼミを通して、自らの興味、関心に向けた分野・領域での卒業論文作成に入ります。

前期：文献学習や、資料収集とその内容発表を中心に行います。

後期：後期は、実際の卒論の構成に沿った（章、節割り）経過発表を進めます。その中で、自分だけで卒論を完成させるのではなく、仲間との共同作業の結果としての卒論を目指します。

担当教員からのメッセージ

大学院在籍中から現在まで、障害児施設での発達相談や、保育所で育ち難さを感じる子どもへの巡回相談を行ってきました。この地域ではメジャーな仕事とは言えませんが、子どもの発達や家族の生活支援にはとても重要な役割だと感じています。また、地域で保護者や関係者とともに、学齢期の障害児を支援する事業所も何カ所かで運営しています。

乳幼児期から学齢期へ、福祉から教育への移行と支援の継続性、そして、ともに子どもの変化を感じ、喜び合える、変わらないキーパーソンの必要性を実感しています。また、パートナーからすれば、十分ではないでしょうが、自称「育メン」として日々子育てに奮闘中でもあります。「おとな」であれ「子ども」であれ「人」としての「尊厳」を尊重できることが実践者として最低限の力だと思います。SWや保育、教育の現場に将来を夢見る皆さんと一緒に、子どもの発達を守り支えることの意味や支援の内容を考えていくことを楽しみにしています。

※ゼミ運営の参考にするので、自分の希望する（取得予定の）資格をエントリーシートに記載（社士・保育併修、保育のみ、社士のみ、など）して下さい。